

# 分析哲学と科学哲学はどのように異なっているのか —二つの研究伝統を歴史研究に基づいて比較する—

小山 虎

## Abstract

What is the exact relationship between analytic philosophy and philosophy of science? In this paper, I will address this question from the perspective of research traditions, with the help of recent historical studies on analytic philosophy. The two groups are particularly focused: the Polish philosophers and the logical empiricists in Berlin. Neither of them is unknown to us. However, by taking seriously their connection to the development of analytic philosophy and philosophy of science as research traditions, I believe, the understanding of our own tradition may be improved.

## 1 はじめに

分析哲学と科学哲学はどのように異なっているのか。これが本稿で扱う問いである。人によっては、この問いに答えることは容易であると思われるかもしれない。例えば、分析哲学はその名が示す通り、「分析」という方法に主眼を置いているが、科学哲学はこちらもその名が示すように科学を対象にしているため、両者は明らかに異なっていると言われるかもしれない。それはその通りである。しかし、この答えだけでは、分析哲学と科学哲学が時には一体として扱われたり、極端な場合には混同される（例えば、一方に詳しいというだけでもう一方にも詳しいとみなされるなど）という事実を説明できない（これは筆者の印象に過ぎないが、両者の間にはそれなりに密接なつながりがあるという印象を何となく持っている読者は少なくない<sup>1)</sup>）。分析哲学と科学哲学が、一見したところ明らかに異なる眼目を持つにも関わらず、このような現象が見られるのはどうしてなのだろうか。実は分析哲学と科学哲学は両者を一体として扱うことが許されるほどの密接なつながりがあるのだろうか。それとも、そのように扱うのは単なる不勉強のなせるわざなのだろうか。

この問いに答えるために本稿では、分析哲学と科学哲学を「研究伝統 (research tradition)」(Laudan (1977) の意味で) とみなすというアプローチを採用する (よって、以下でも「分析哲学」と「科学哲学」という言葉は、特定の研究伝統としてのこれらを指すものとして使用する<sup>2)</sup>)。その理由は、ひとつには、分析哲学が方法論的観点からは統一をなしていないという見解が受

け入れられつつあると思われることである<sup>3</sup>。もうひとつは、分析哲学のことを「分析的伝統 (analytic tradition)」というように、(Laudan (1977) と同じ意味かどうかはともかく) ある種の伝統とみなすことは一般的になっているからである。例えば、飯田 (2007) や Williamson (2014) では、「分析的伝統 (analytic tradition)」という表現が登場している (ただし、前者では「分析哲学」が科学や数学と密接な関係を持ち続けてきた哲学的伝統とされており、分析哲学と科学哲学の違いはかなり薄れているのに対し、後者で中心に論じられているのは形而上学の位置付けである)。

研究伝統としてみると、分析哲学と科学哲学にはかなりの共通点が見られる。例えば、どちらも Frege や Russell, Wittgenstein に始まり、Carnap ら論理実証主義者によって大きなムーブメントとなり、戦後アメリカで Quine らに引き継がれたとみなすことができるだろう。事実これは、分析哲学にとっての「教科書的」理解ではないかと思われる。

しかしながら、本稿の主張は、このような「教科書的」理解は誤りではないにせよ、多くのことを無視して初めて成り立つものであり、分析哲学と科学哲学の関係を理解するには不十分である、というものである。むしろ、分析哲学や科学哲学を他の哲学伝統、例えば、ドイツ観念論やイギリス経験論などと比較して歴史的な位置付けを説明するであれば (そしてこれは分析哲学や科学哲学を専門としない哲学者や非哲学者に対して分析哲学や科学哲学のことを説明する時には有用であると思われるのだが)、両者はまったく異なる二つの研究伝統であるとみなしたほうが適切であると本稿の著者は考えている。

このことを示すために、本稿では近年の分析哲学史研究を参照し、上記の「教科書的」理解では登場しない二つの学派の位置付けを検討することで、分析哲学と科学哲学の違いを明確化することを試みる。具体的には、二十世紀前半の分析哲学と科学哲学において重要な役割を果たしていた Tarski らポーランドの哲学者・論理学者たちと、Reichenbach らベルリンの論理実証主義 (論理経験主義) 者たちを取り上げる。次の第 2 節では、1930 年代には分析哲学の一派とみなされていたポーランド哲学と分析哲学および科学哲学との関係性を検討する。そして第 3 節では、ウィーン学団の陰に隠れているベルリンの哲学者が現在の科学哲学に与えた影響とウィーン学団との違いを検討する。両者の位置付けが明確化されれば、ケンブリッジやウィーンを中心とする分析哲学および科学哲学の理解とは異なる別の理解が得られると期待する。最後の第 4 節では、分析哲学と科学哲学の「一体視」が何に由来するのか、およびそれにまつわる問題点について若干の考察を与える。

本題に入る前に一点注意を述べておきたい。本稿は一次文献を中心に扱うよ

うな歴史研究ではなく、主に二次文献に基づくサーベイに近いものである<sup>4</sup>。よって、本稿の結論も、厳密な論証に支えられたものではなく、可能性の提示にとどまる。詳細については、本稿をきっかけに分析哲学史および科学哲学史の研究が広まっていくことで明らかにされることを期待したい。

## 2 1930年代における分析哲学の状況

近年出版された千ページを超える分析哲学史のハンドブックである Beaney (2013) によれば、「分析哲学」という言葉が現在の意味で使われているのが確認できる最初の文献は「ヨーロッパにおける分析哲学の印象と評価 (Impressions and Appraisals of Analytic Philosophy in Europe)」(Nagel, 1936a) だとされる (p. 44)<sup>5</sup>。この論文は、著者である科学哲学者の Ernst Nagel が奨学金を得てヨーロッパを周遊して回って得られた知見の報告である<sup>6</sup>。本論文の冒頭で Nagel は、ケンブリッジ、ウィーン、プラハ、ワルシャワ、ルヴフ (Lwów, 現在はウクライナの Lviv) という五つの都市名を挙げて、そこで公言されている哲学の状況を報告すると述べている。この論文でケンブリッジとウィーンが挙げられるのは何の不思議もないだろうが (ただし、Russell は罷免されてケンブリッジにいない)、残りの三都市については不思議に思われるかもしれないので説明しておく、プラハは当時 Carnap と、こちらもウィーン学団のメンバーである物理学者の Philipp Frank がおり、ウィーン学団のもうひとつの活動拠点だったと考えられる (論理実証主義の拠点としてウィーンの次に挙げられるべきはベルリンだが、前述のようにベルリンについては次の第3節で論じる)。残りの二つ、ワルシャワとルヴフは、分析哲学と結びつけて言及されることこそケンブリッジやウィーンに比べて少ないが、Tarski やメレオロジーの発案者である Leśniewski、三値論理で知られる Lukasiewicz など、現在でも名前が知られている論理学者がいた都市 (大学) であり、現在ではルヴフ・ワルシャワ学派 (Lvov-Warsaw School) と呼ばれている<sup>7</sup>。

### 2.1 ルヴフ・ワルシャワ学派

ルヴフ・ワルシャワ学派について簡単に説明しておこう。K. Twardowski というウィーン出身のポーランド人哲学者がウィーン大学で学位を取得後、1895年にルヴフ大学で職を得たことがこの学派の始まりだとされる。Twardowski は哲学者だけでなく、論理学者や数学者、心理学者も含めた研究コミュニティ

を結成し、「科学的な」哲学を推進していた。その後、1915年にワルシャワ大学が活動を再開するに伴い<sup>8</sup>、ポーランド語による教育が許されていたルヴフ大学で育った多くの哲学者がワルシャワ大学で職を得ることになった。第一次大戦後はルヴフもポーランド領に戻ることになり、両大学がポーランド哲学を代表することになった。ルヴフ・ワルシャワ学派と呼ばれるのはこのためである<sup>9</sup>

ルヴフ・ワルシャワ学派に属しているとされる代表的な哲学者としては、前述の Tarski, Leśniewski, Łukasiewicz がいるが、彼らはいずれも戦後のポーランドにはいない (Tarski と Łukasiewicz はそれぞれアメリカとアイルランドに移住, Leśniewski は 1939 年に死去)。しかし, Woleński (2015) によると, Łukasiewicz や Leśniewski と同様に Twardowski の指導を受けた T. Kotarbiński, K. Ajdukiewicz, M. Kokoszyńska といった哲学者はポーランドに留まり、戦後も哲学研究を続けた。この他, A. Lindenbaum や M. Presburger といった数学者もルヴフ・ワルシャワ学派のメンバーだとされる<sup>10</sup>

こうした名前を見れば、ルヴフ・ワルシャワ学派が特に数理論理学を通じて分析哲学と関係していることは明らかだろう。数理論理学の観点から当時の分析哲学・科学哲学を再検討するという課題は極めて興味深いものであるが、残念なことに、それを本稿でカバーすることは明らかに著者の力量を超えている。本稿では、ルヴフ・ワルシャワ学派が数理論理学だけでなく、形而上学や心理学に関して分析哲学の誕生に影響を与えている点について焦点を絞ることにしたい。

## 2.2 分析哲学の心理学的起源

そのためにまず確認しておきたいのは、ルヴフ・ワルシャワ学派の位置付けである。ルヴフ・ワルシャワ学派のメンバーはいずれもポーランド人であるが、どのような学派だったのかを正確に理解するためには、当時の国際状況を踏まえて検討する必要がある。まず、Twardowski 自身は前述のようにオーストリアのウィーンで学位を取得している。当時のポーランドはオーストリアの支配下にあり (ルヴフも Lemberg というドイツ語の名で呼ばれていた)、Twardowski は学位取得に関して Franz Brentano の指導を受けており、強い影響を受けていたことが推測される。

Brentano は分析哲学史ではときおり登場する哲学者だが、多くの分析哲学者にとっては、Alexis Meinong の指導をしていたとして知られている程度ではないかと思われる。Meinong は非存在者さえ許容する寛容な存在論の支持

しているとして、「表示について (On Denoting)」(Russell, 1905)で批判されたことで広く名前を知られており、今日でも Meinong 主義はひとつの形而上学的立場として確立されている<sup>11</sup>。しかし、Meinong がもっぱら形而上学の研究をしていたわけではないことはあまり知られていないと思われる。Meinong の寛容な存在論は、彼が心理学者であることに関連している。Meinong はグラーツ大学にオーストリアで最初の実験心理学の研究室を開いた心理学者であり、Russell が Meinong の立場を批判したのも、グラーツ大学実験心理学研究室設立十周年記念論文集の書評を *Mind* 誌で担当することになったからのものである<sup>12</sup>。

注意すべきなのは、Meinong だけが例外的に心理学者であったのではなく、むしろ Brentano やその弟子たちが心理学の歴史では実験心理学の創成期に活躍した心理学者として知られていることである。例えば、Boring (1950) の「実験心理学の基礎 (The Foundation of Experimental Psychology)」というセクションは、Fechner, Helmholtz, Wundt という錚々たる三名を紹介する章の後に、Brentano とその弟子にあたる心理学者 Carl Stumpf と G. E. Müller を紹介する章で締めくくられている (p. 345ff.)。Twardowski の研究コミュニティに心理学者もいたことは前述したとおりだが、Twardowski も心理学に強い関心を持っており、Twardowski (1894) は心理学に関する著作である。前述の Stumpf は 1894 年にベルリン心理学研究所 (Institute of Psychology in Berlin) を設立した心理学者であり、指導した学生の中には、ゲシュタルト心理学で知られ、論理実証主義と繋がりが深い Kurt Lewin がいる。また現象学者の Husserl も Brentano の指導を受けた哲学者のひとりである。このように、当時のドイツ・オーストリアには、Meinong や Husserl など Brentano から強い影響を受けた心理学者、哲学者がかなりいたのである (彼らは Brentano 学派とも呼ばれる<sup>13</sup>)。Woleński (2015) でも加地 (2007) でも、Twardowski が Brentano 的な哲学をポーランドに広めようとしていたとされていることを踏まえると、ルヴフ・ワルシャワ学派を Brentano の影響を受けた一派とみなすことができるだろう<sup>14</sup>。

Brentano 学派の心理学はドイツやオーストリアで影響力を持っていただけでなく、分析哲学が誕生した頃のケンブリッジでよく知られていたということは、あまり知られていないと思われる。分析哲学の誕生としてよく言及されるのが、それ以前にイギリスで主流だった F. H. Bradley らの新ヘーゲル主義と呼ばれる観念論的立場に対して、G. E. Moore (1899) で主張された極端な実在論であり、Russell (1903) もそれに従っていることで知られている。当時 Moore や Russell が書いたものを見る限り、彼らの論敵は Bradley であ

るように見えるだろう。しかし、当時のケンブリッジには、時間論で知られる J. M. E. McTaggart や、Kant 研究者として高名だった Edward Caird といった観念論者がいた<sup>15</sup>。こうした哲学者と共に Russell や Moore を教えていたのが G. F. Stout という心理学者である。現在では Stout の名前はほとんど知られていないが、分析哲学の誕生に関して Stout が大きく関わっていたことはほとんど疑いの余地がない。Stout は単に Russell と Moore の教師だっただけでなく、Moore (1899) や Russell (1905) が掲載された *Mind* 誌の編集長を長らく務めており (1891 年から 1920 年まで務め、Moore に譲っている)、どちらの論文も Stout が掲載前に審査をしている (加えて、前述の Russell によるグラーツ大学実験心理学研究室設立十周年記念論文集の書評も *Mind* 誌に掲載されたものであることも思い出されたい)。そして Stout は Brentano 流心理学のイギリスへの紹介者だったと考えられている<sup>16</sup>。『分析心理学 (Analytic Psychology)』(Stout, 1896) には Brentano だけでなく彼の弟子たちへの言及が数多くあり、また、*Mind* 誌に前述した Twardowski (1894) の書評を匿名で書いていることが判明している。

こうした背景から、現在の分析哲学史では、Moore と Russell が分析哲学に至った背景には、Stout を経緯した Brentano 流の心理学がある考えられている。もしそれが正しいのであれば、ルヴフ・ワルシャワ学派と初期の分析哲学は共通のルーツを持っていることになる<sup>17</sup>。

### 2.3 ルヴフ・ワルシャワ学派とウィーン学団の関係

一方、ルヴフ・ワルシャワ学派とウィーン学団との関係は、ケンブリッジとの関係よりも深いものだったようである。ウィーン学団のメンバーだった数学者の Karl Menger の自伝である Menger (1994) によれば、両者の交流は 1929 年の秋に Menger がワルシャワを訪問したことに始まる。そこで Menger は Lukaszewicz や Leśniewski と出会うが、特に大きな印象を残したのが、当時すでに名前が知られていた Tarski だったらしく、Menger は Tarski のウィーン招聘に尽力し、1930 年の 2 月に Tarski はウィーンを訪問する。Tarski はこの時に Carnap と出会って両者は意気投合し、今度は Tarski が Carnap をワルシャワに招聘することになり、同年 10 月に Carnap はワルシャワを訪問している。

両者の交流は、ウィーン学団が開催していた「統一科学国際会議 (International Congress for Unity of Science)」によってより大規模なものとなる。統一科学国際会議の詳細が記録されている *Erkenntnis* 誌の初期の号による

と<sup>18</sup>、統一科学国際会議は、1934年の9月にプラハで開催された「プレ大会 (Vorconferenz)」から1941年に開催された第六回のシカゴ大会まで通算7回開催された。統一科学国際会議へのルヴフ・ワルシャワ学派のコミットメントはかなりのものがあり、例えばプレ大会については、チェコのプラハがポーランドから比較的近いこともあってか、Ajdukiewicz, Łukasiewicz, Tarskiが登壇している。プレ大会から1939年にハーバード大学で開催された第五回大会まで、ルヴフ・ワルシャワ学派のメンバーはのべ18人が登壇しており、特にTarskiは1936年にコペンハーゲンで開催された第二回大会以外のすべてで登壇している。ウィーン学団からの登壇数がのべ22人であることを考えると、ほぼ同規模の参加者だったと考えてよいだろう。一方、イギリスからの参加者は圧倒的に少なく、1938年にケンブリッジで開催された第四回大会を除けば、1935年にパリで開催された第一回大会にA. J. AyerとR. B. Braithwaiteの二名が登壇しているのみであり、第四回大会でもAyerとBraithwaite以外に登壇したのはL. Susan StebbingとMax Black、そしてMooreとRyleが開催あいさつをしたのに留まる<sup>19</sup>。こうしたデータは、ルヴフ・ワルシャワ学派がTarskiを中心に統一科学運動に深く関わっていたことを示唆している一方で、当時イギリスにはRussell, Moore, Wittgenstein、さらにはRyleといった分析哲学を代表するビッグネームがいたにも関わらず、積極的に関わったのは論理実証主義のイギリスへの紹介者であるAyerとBraithwaite程度だったことと対照的である。

このようにルヴフ・ワルシャワ学派は、イギリスで生まれた分析哲学と心理学的ルーツを共有していながら、同時代のイギリスの分析哲学者たちよりもウィーン学団の統一科学運動にコミットしていたという点で、分析哲学と科学哲学の隙間を埋める存在だったように見える（また、ルヴフ・ワルシャワ学派の代表的なメンバーが論理学者であることを考えると、ウィーン学団との「近さ」はさらに強まるように思われる）。ただし、ルヴフ・ワルシャワ学派がウィーン学団とどれほど近かったかは注意を要する問題である。例えば、Brożek (2017)が指摘しているように、プレ大会で発表されたAjdukiewicz (1934)では、ルヴフ・ワルシャワ学派のメンバーは誰もウィーン学団の主要テーゼを受け入れておらず、方法論的態度や分析の対象となっている問題の類似性や親和性が一部に見られる程度だと述べられており (p. 151), KokoszyńskaはCarnapの形而上学批判に対して、科学としての形而上学の可能性を擁護する議論を展開している (Brożek, 2017, sec. 4)。このように、ルヴフ・ワルシャワ学派は、同時代のイギリスの分析哲学者よりはウィーン学団に近い活動をしながらも、反形而上学的傾向は受け入れず、形而上学や心理学など様々

な分野の研究が行なわれているといった点で、むしろ現在の分析哲学と共通点の多い学派だったとみなすのが適当のように思われる。

### 3 ベルリン・グループ

前述のように、Nagel (1936a) ではケンブリッジなど五つの都市が言及されていた。しかし、科学哲学について考えてみると、ベルリンが言及されていないことに気づかされる。ベルリンには Reichenbach や Hempel がおり、論理実証主義の第二の拠点だったことは広く知られている。たしかに Reichenbach らが分析哲学者とみなされることはないが、分析哲学と科学哲学の間に密接なつながりがあると考える人にとっては、ベルリンへの言及がないことは不思議に思われるはずである<sup>20</sup>。もっとも、Nagel がベルリンに言及しなかったことには様々な推測が可能である。例えば、1935年の段階でベルリンの主要な論理実証主義者はすでにドイツ国外に脱出していたということが挙げられる（具体的には、Reichenbach は1935年にトルコのイスタンブールに移住し、その後1938年にアメリカに移住しており、Hempel は1934年にベルギーのブリュッセルに移住し、1937年にアメリカに移住している）。また、当時のドイツではすでにナチスが政権を握っており、ユダヤ人である Nagel がドイツ国内を訪問することはリスクがあったとも考えられる。

しかし、Nagel がベルリンに言及しなかった理由が実際にはなんであれ、当時のベルリンの論理実証主義者たちは分析哲学から一線を画した存在だったと考える理由がある。そもそも、Reichenbach に代表されるベルリンの論理実証主義者はもともとウィーン学団とは別グループであり（ウィーン学団が Schlick のサークルであったのに対し、ベルリンは Reichenbach のサークルだった）、両グループの間で合流や合併があったわけでもない。近年では論理実証主義の「ベルリン・グループ」はウィーン学団と密接に連携していた別のグループとみなされている（代表例は Milkov and Peckhaus (2013) である）。実際、Nagel (1936a) の二ヶ月後に同じ雑誌 (*Journal of Philosophy*) に掲載された Reichenbach (1936) では、経験主義の新たなあり方としての「論理経験主義」を推進したとしてウィーン学団とベルリン・グループが紹介されているが、プロトコル文論争に明け暮れていたウィーン学団とは異なり、「科学の分析という方法 (wissenschaftsanalytische Methode)」から離れなかったベルリン・グループが自画自賛されている。そして、Milkov and Peckhaus (2013) によれば、ウィーン学団とは異なる活動をしていたベルリン・グループの方法論は、カントの超越論的論理学を否定したマールブルク派新カント

学派による科学の分析に近いとされる (p. 24) <sup>21</sup>.

### 3.1 ベルリン・グループの現代の科学哲学への影響

ベルリン・グループの方法論がマルブルク派新カント学派の方法論を引き継いでいる可能性は、研究伝統としての科学哲学と分析哲学の違いを考えるという本稿の課題にとっては極めて興味深い。なぜなら、通常、マルブルク派新カント学派が分析哲学に一定の影響を及ぼしたとは考えられていないが<sup>22</sup>、現在の科学哲学に対して、ベルリン・グループは直接的な影響を及ぼしていると考えられるからである。

論理実証主義の影響力が急速に消えていったことはよく知られているが、そもそも上述の統一科学国際会議の開催に積極的に関わっていたウィーン学団の中心メンバーは短期間のうちにバラバラになっていったことには注意を払う必要がある。まず、ウィーン学団の創設メンバーでもある Moritz Schlick と Hans Hahn はナチス・ドイツがオーストリアを併合する前にこの世を去っている。Otto Neurath は 1934 年にオランダのハーグに移住し、そこで活動を続けるが、1940 年のナチス・ドイツの侵攻によりイギリスに逃れ、数年後にこの世を去る。Frank は Neurath の死後、彼が設立した「統一科学研究所 (Institute for the Unity of Science)」を引き継ぎ、統一科学運動の指導的立場に就くが、科学哲学をアメリカのアカデミアに定着させることには大きく貢献したものの、哲学的にはほとんど影響を残すことはなく、統一科学研究所も活動資金の問題でアメリカ科学哲学会 (Philosophy of Science Association) と合流することになる。若きメンバーだった Herbert Feigl はミネソタ科学哲学センターを設立し、Wilfred Sellars とともに論文集を製作するなど、自分たちの方法論を広めることに成功し、加えて科学的事実論や心の哲学の同一説を提唱して議論の活発化に大きく貢献するが、科学哲学や分析哲学のメインストリームとなることはなかった。そして Carnap も主要な関心を科学哲学から帰納論理と形式意味論に関心を移す。Quine による分析性批判の影響もさることながら、そういった純粋に哲学的な側面よりも、単に主要メンバーがいなくなることにより、研究コミュニティとしてのウィーン学団が持っていた活気が失われたという可能性も十分考えられるように思われる<sup>23</sup>。

それに対し、ベルリン・グループの科学哲学への影響はかなり大きい。具体的には、ピッツバーグ大学は科学哲学の研究拠点として国際的に知られているが、ピッツバーグ大学の科学哲学センターの初期の歴代所長はベルリン・グループの Reichenbach や Hempel の教え子たちである (名前を挙げると Adolf

Grünbaum, Nicholas Rescher, Gerald Massey, Larry Laudan). また同大学の科学史科学哲学科にも Wesley Salmon や John Earman といった教え子がいる。Rescher (2006) によれば、このようにベルリン・グループの関係者が集まったのは偶然の産物ではなくむしろ意図的だった。彼らピッツバーグ大学の科学哲学者たちはベルリン・グループの第三世代にあたり、Reichenbach の関心を部分的に共有しているとされる (p. 295) <sup>24</sup>。

現代の科学哲学のアジェンダを決定したのは論理実証主義だとされているが (伊勢田 (2018) や Rosenberg (2000) など) このような現代の科学哲学に対するベルリン・グループの強い影響力が正しいのであれば、ウィーン学団よりはむしろベルリン・グループを念頭に置く方が適切かもしれない。だとすると、研究伝統としての科学哲学で引き継がれている方法論があるとするならば、それは Reichenbach (1936) で自画自賛されたものであり、当時ドイツ哲学界で隆盛を誇っていた新カント学派の一派に由来するものである可能性があるとは言えるだろう <sup>25</sup>。さらには、19 世紀のオーストリアにおけるカント哲学の受容はドイツと大きく異なっており、Brentano はカント哲学に批判的だったと言われている <sup>26</sup>。このことは、科学哲学が、ルヴフ・ワルシャワ学派を含む分析哲学と方法論においても大きく異なっていることを示唆している。

## 4 おわりに

本稿で述べてきたことをまとめよう。1930 年代の分析哲学と科学哲学は、前者が心理学や形而上学を許容するルヴフ・ワルシャワ学派も含むという点で研究対象に関してかなりの違いがあり、後者を代表するベルリン・グループが新カント学派に由来する方法論を引き継いでいるという点で方法論に関してもかなり違いがあったように思われる。ただし、論理実証主義が戦後のアメリカでプラグマティズムと結びついて変容したとされていることを考えると、本稿で述べたことはほぼそれ以前に限定されていることには注意が必要であろう。しかし、実際に当事者たちにとっても、二つはまったく異なると認識されていたかもしれないということを最後に指摘して本稿を締めくくりたい。

上述の Reichenbach (1936) では、1935 年にパリで開催された第一回統一科学国際会議が、世界中の経験主義者や論理学者を招き、論理実証主義者 (ウィーン学団とベルリン・グループ)、ポーランドの論理学者、フランスの経験主義者、アメリカのプラグマティスト、そしてこれらから隔絶された世

界に散らばった哲学者たちを国際的に統合する最初の取り組みだとされている (p. 160). 注目すべきは, Nagel がベルリンに言及していなかったのと同様に, Reichenbach はイギリスの哲学者に言及していないことである. もし Reichenbach の関心が科学哲学だけであるならば (そしてその可能性は低いと思われるが), 彼の目にはイギリスの分析哲学者の大半は, 志を同じくする仲間としては映っていなかったことだろう.

しかし, 仮に Nagel がベルリン・グループを分析哲学とみなさず, Reichenbach がイギリスの分析哲学者を統一科学運動の参加者と思っていなかったのなら, どうして後世のわれわれは両者が (少なくとも広い意味では) 同じグループに属しているように見えてしまうのだろうか. ひとつ考えられるのは Carnap の存在である. ドイツ国内で教育を受けた Carnap は Reichenbach と若い頃からの知り合いであり, Carnap の博士論文を指導した Bruno Bauch は新カント学派に属する哲学者である (マールブルク派ではなく西南派ではあるが). ウィーンで職を得た Carnap はウィーン学団の中心メンバーとなるが, Tarski と知り合いことで反形而上学を標榜するウィーン学団から形而上学を許容するルヴフ・ワルシャワ学派に近づく<sup>27</sup> そして Quine に大きな影響を与え, 戦後アメリカの分析哲学でも一定の地位を得る. Carnap であれば, 分析哲学と科学哲学の両方が共存していると言えそうであり, 彼が科学哲学者や分析哲学者の典型であれば, たしかに両者の間に多くの一致点がありそうだと考えてもおかしくないかもしれない. 一方で, 本稿で述べてきたことからすれば, 分析哲学と科学哲学に両方に属すことのできた Carnap はあくまで特殊例であり, Carnap に完全に同調した哲学者は, 科学哲学にも分析哲学にもあまりいなかったのではないと思われる.

言うまでもなく, Carnap は科学哲学と分析哲学の両方を代表する哲学者であり, 彼に分析哲学や科学哲学を代表させることが誤りだとは言えない. しかし, 分析哲学と科学哲学を一体として扱うことが, 単なる無理解に基づくものではなく, こうした著名な哲学者に注目することによる代表性バイアスに由来する可能性があるということには, 分析哲学と科学哲学の関係という本稿の関心を離れても, 一定の注意を払う必要があるように思われる.

研究には分野が付きまとう. 例えば, 個別科学の哲学をする際には特定の科学分野に注目する必要がある. 科学一般を対象にする場合でも, 分野間の比較や共通性を考えるのであれば, なんらかの仕方で扱う分野を特定しなければならない. このとき, 分野の範囲や中身が恣意的に選択されていたのであれば, その研究の意義が損なわれかねない. 線引き問題を解決する必要はないにせよ, なるべくバイアスを排除した基準が求められる. 同様のことは

科学哲学以外でも、なんらかの分野を扱う場合は生じる。具体的にはメタ形而上学がそうである。だが、このようなケースで利用される標準的な基準があるという話は寡聞にして聞いたことがない（もしそういう基準があるのであれば、分析哲学や科学哲学にも適用できるはずであり、本稿の存在意義はなくなる）。

研究の意義が損なわれるというだけではない。「形而上学はアプリアリな探求である」というように、ある分野について、その分野に分類される研究者一般についての総称文（generics）を用いて論じることは少なくない。しかし、総称文を用いれば不当な規範的な主張を非明示的な仕方で行うことができると主張されている（和泉，2018）。実際、自身の分野に関する総称文を用いて不当な主張をされた経験を持つ哲学者は少なくないのではないだろうか。だが、そうした不当な主張は、特定の哲学者に分野を代表させることによるバイアスによるものなのかもしれないのである。哲学では規範的な主張がなされることも少なくないことを考えると、分野について論じる際には代表性バイアスによって不当な主張をしてしまう危険性もあるということには十分な注意が払われるべきだと思う。

## 謝辞

本稿は、科学基礎論学会 2017 年度大会での個人研究発表、名古屋大学での講演、東京大学主催メタ哲学セミナーでの講演、そして日本科学哲学会第 50 回大会シンポジウムでの提題に基づいている。当日の聴衆といただいたコメントに感謝したい。

本稿の作成にあたって、歴史研究の経験がない著者は様々な方にアドバイスを求めた。とりわけ笠木雅史氏に負う箇所は枚挙にいとまがなく、特にベルリン・グループに関しては多大な教示をいただいた。笠木氏を含め、著者からの質問に快く答え、有益な助言をしていただいた諸氏に心より感謝したい。また、初稿に含まれていた多くの誤りを指摘していただいた伊勢田哲治本誌編集委員長にも深く感謝したい。

本研究は、JSPS 科研費 15K02001 の助成を受けたものである。

## 注

<sup>1</sup> 日本科学哲学会がその名称にも関わらず、科学とほとんど関わりのない分析哲学的手法で行われた美学や倫理学の研究を許容しているということも、こうした印象を促進していると思われる。

<sup>2</sup> ただし、分析哲学と科学哲学を異なる研究伝統として区別すると別の問題が生じることには注意されたい。本稿で「科学哲学」と呼ぶのは論理実証主義に由来するものだが、この研究伝統は、それ以外のフランスの科学哲学や戦後ドイツの科学哲学と区別するために、「分析科学哲学 (analytical philosophy of science)」(Uebel, 2010) という、分析哲学と科学哲学の研究伝統としての違いを無視した名称で呼ばれる (後者を総称して「大陸科学哲学 (continental philosophy of science)」と呼ぶこともある)。この問題は、いわゆる「分析哲学と大陸哲学の対立」にも関わるスコープの大きなものであるため、本稿で扱うことはできない。

<sup>3</sup> 代表的な例としては、Preson (2010) が挙げられる。

<sup>4</sup> 言及する哲学者についても、大半は *Stanford Encyclopedia of Philosophy* や *Internet Encyclopedia of Philosophy* に項目がある。それらの項目のひとつひとつを文献表にあげることはしない。

<sup>5</sup> 他には Raatikainen (2013) も同様の認識を示している (p. 19)。

<sup>6</sup> こうしたヨーロッパ周遊は当時のアメリカの哲学者の間では一般的だったらしく、Sidney Hook (1930) は、Nagel (1936a) と同じ *Journal of Philosophy* に掲載されたドイツ哲学について同様の報告論文である。また、Quine も同様の奨学金を経て、ウィーンや Carnap のいたプラハ、Tarski のいたワルシャワを訪問している (例えば、Feferman and Feferman (2004) にその旨の言及がある)。

<sup>7</sup> ルヴフ・ワルシャワ学派については、Woleński (2015) や中井 (2018) を参照されたい。また、加地 (2007) は、「ポーランド学派」という名称が用いられているが、同学派の簡潔な解説である。

<sup>8</sup> いわゆる「ポーランド分割」により縮小された当時のポーランドはロシアの衛星国家であり、ワルシャワ大学も設立後まもなく活動停止状態にあったが、第一次世界大戦中のドイツ軍の侵攻により活動が再開された。

<sup>9</sup> 戦間期のポーランドの著名な大学としては、Copernicus のいたクラクフ大学やボズナン大学があるが、Woleński (2015) では、Twardowski の教え子はこれらの大学でも職を得ているため、ルヴフとワルシャワが当時のポーランド哲学の中心だったとされている。

<sup>10</sup> 加えて、ルヴフ大学やワルシャワ大学には、Tarski に集合論を教えた W. Sierpinski や Tarski との共著論文で知られる S. Banach もおり、かなり広い研究コミュニティが形成されていたことがうかがわれる。

<sup>11</sup> 現代の Meinong 主義の代表的な文献としては、Routley (1980) や Priest (2005) を挙げることができる。

<sup>12</sup> Russell と Meinong の間のやりとりについては、Linsky (2014) が詳しい。

<sup>13</sup> この呼び名は一般的なものになっているようである。例えば、Kriegel (2017) を見よ。

<sup>14</sup> 本稿で詳細に取り上げることはできないが、Brentano の影響と考えられることとして、アリストテレス研究がある。加地 (2007) も述べているように、ルヴフ・ワルシャワ学派にはアリストテレス的な実在論的形而上学の傾向を Brentano から引き継いでいた (p. 428)。

<sup>15</sup> 加えて、Henry Sidgwick も直前まで教授職に就いていた (1900 年に病気のため辞職し、まもなく死去)。Sidgwick も Caird も Moore を指導しており、Moore の学位論文で Kant と Sidgwick の立場が論じられているのは、Sidgwick と Caird が自分の学位論文を読むことを Moore が認識していたからだということが遺稿研究により明らかになっている。詳しくは、Preti (2008) を見られたい。

<sup>16</sup> van der Schaar (2013) はまさにこの点についての研究書である。

<sup>17</sup> もちろん両者の関係がどの程度であったのかは議論の余地がある。例えば、van der Schaar (2013) の書評である Preti (2016) によれば、Stout も Brentano も (そして Twardowski も) Moore と Russell の実在論に直接の影響を与えている証拠は見つかっていないようである (p. 3)。

<sup>18</sup> 周知のように、*Erkenntnis* 誌は論理実証主義の機関紙として Reichenbach と Carnap を編集長にベルリンで創刊されたジャーナルである。統一科学国際会議については、第 5 巻から出版が中断する第 8 巻までに様々な情報が掲載されている。

<sup>19</sup> 統一科学国際会議に参加したイギリスの哲学者はいずれも「ケンブリッジ分析学派 (Cambridge School of Analysis)」と呼ばれるグループと関わっている。この学派と論理実証主義と関わりは極めて興味深いのが、別稿に譲る。

<sup>20</sup> 正確には、Nagel (1936a) の続編 Nagel (1936b) に Reichenbach について言及した注がある (n. 2)。ただし、そこで Reichenbach は Felix Kaufman と並ぶかたちで論理実証主義者の別派とみなされている。

<sup>21</sup> ベルリン・グループの「科学の分析という方法」についてここで詳しく論じる余裕はないが、ひとつの理解は、個別科学の詳細（概念、理論、方法論など）を分析し、合理的再構成をすることによって、それが基づく原理を明らかにすることだと思われる（例えば Milkov (2008) を見よ）。

<sup>22</sup> ただし、Friedman (2002) のように Carnap への影響は指摘されていることからすると、影響がまったくなかったとは考えにくい。

<sup>23</sup> このような状況になったことの原因としては、例えば Reisch (2005) を参照されたい。

<sup>24</sup> アメリカ科学哲学学会の学会賞に名前が残っている Hempel 自身も Princeton を定年後、ピッツバーグで教えていることは示唆的である。

<sup>25</sup> 次節の冒頭でも触れるように、科学哲学の歴史を考えれば、むしろプラグマティズムと結びついた方法論が引き継がれていることは十分ありうるだろう。本当に新カント学派にまで遡ると言えるかどうかは今後の研究課題としたい。

<sup>26</sup> この点については Wilfing (2015) を見よ。ただし、ドイツとオーストリアで哲学の状況がどれほど異なっていたかには異論もあり、それほど単純なものではなさそうである。

<sup>27</sup> Neurath は Carnap が形而上学者になってしまうことを心配していたらしい (Mancosu, 2010, p. 418)。

## 文献

Ajdukiewicz, Kazimierz (1934). “Der logistische Antiirrationalismus in Polen”. *Erkenntnis* 5:151—64.

Beaney, Michael (ed.) (2013). *The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy*. Oxford University Press.

Boring, Edwin G. (1950). *A History Of Experimental Psychology*. The Century Company.

Brożek, Anna (2017). “Maria Kokoszyńska: Between the Lvov-Warsaw School and the Vienna Circle”. *Journal for the History of Analytical Philosophy* 5(2), 19–36.

Feferman, Anita Burdman, and Feferman, Solomon (2004). *Alfred Tarski: Life & Logic*. Cambridge University Press.

Friedman, Michael (2002). “Carnap, Cassirer, and Heidegger: The Davos Disputation and Twentieth Century Philosophy”. *European Journal of Philosophy* 10 (3):263–274.

Hook, Sidney (1930). “A Personal Impression of Contemporary German Philosophy”. *Journal of Philosophy* 27 (6):141–160.

飯田隆（編）(2007). 『哲学の歴史〈第11巻〉論理・数学・言語』. 中央公論新社.

- 伊勢田哲治 (2018). 『科学哲学の源流をたどる』. ミネルヴァ書房.
- 和泉悠 (2018). 「総称文とセクシャルハラスメント」. 『哲学』 69号, pp. 32–43.
- 加地大介 (2007). 「両大戦間のポーランドにおける論理学と哲学」. 飯田 (2007) 所収, 427–430.
- Kriegel, Uriah (ed.) (2007). *The Routledge Handbook of Franz Brentano and the Brentano School*. Routledge.
- Laudan, Larry (1977). *Progress and its Problems: Toward a Theory of Scientific Growth*. University of California Press.
- Linsky, Bernard (2014). “Notes and Correspondence for Russell ’s 1905 Review of Meinong”. *Russell: The Journal of Bertrand Russell Studies* 34 (1), 35–62.
- Mancosu, Paolo (2010). *The Adventure of Reason: Interplay Between Philosophy of Mathematics and Mathematical Logic, 1900-1940*. Oxford University Press.
- Menger, Karl (1994). “Poland and the Vienna Circle”. In L. Golland, B. McGuinness, and A. Sklar (eds.) *Reminiscences of the Vienna Circle and the Mathematical Colloquium*. Vienna Circle Collection, vol 20. Springer.
- Milkov, Nikolay (2008). “Reichenbach's Concept of Logical Analysis of Science and his Lost Battle against Kant”. In *From the ALWS Archives: A Selection of Papers from the International Wittgenstein Symposia in Kirchberg am Wechsel* <<http://wab.uib.no/agora-alws/>>, Republication by the Wittgenstein Archives at the University of Bergen, 2013, Original Publication In Alexander Hieke and Hannes Leitgeb (eds.) *Papers of the 31st IWS: Reduction and Elimination in Philosophy and the Sciences*, Kirchberg am Wechsel: ALWS 2008, 224–226.
- Milkov, Nikolay, and Peckhaus, Volker (eds.) (2013). *The Berlin Group and the Philosophy of Logical Empiricism*. Springer.
- Moore, G. E. (1899). “The Nature of Judgment”. *Mind* 8 (2):176–193.
- Nagel, Ernest (1936a). “Impressions and Appraisals of Analytic Philosophy in Europe. I”. *Journal of Philosophy* 33(1):5–24.

- (1936b). “Impressions and Appraisals of Analytic Philosophy in Europe. II”. *Journal of Philosophy* 33(2):29–53.
- 中井杏奈 (2018). 「翻訳: ルヴフ=ワルシャワ学派 (解説) 第 1 回」. 『フィカル 分析哲学と文化をつなぐ』 3(2).
- Preston, Aaron (2010). *Analytic Philosophy: The History of an Illusion*. Continuum.
- Preti, Consuelo (2008). “‘He Was In Those Days Beautiful And Slim’: Bertrand Russell and G.E. Moore, 1894–1901”. *Russell: The Journal of Bertrand Russell Studies* 28 (2), 101–126.
- (2016). “Review: *G. F. Stout and the Psychological Origins of Analytic Philosophy*, by Maria van der Schaar”. *Journal for the History of Analytical Philosophy* 4(3), 1–6.
- Priest, Graham (2005). *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*. Oxford University Press. (邦訳: グレアム・プリースト (久木田水生, 藤川直也訳), 『存在しないものに向かって: 志向性の論理と形而上学』, 勁草書房, 2011.)
- Raatikainen, Panu (2013). “What Was Analytic Philosophy?”. *Journal for the History of Analytical Philosophy*, 2(1): 11–27.
- Reichenbach, Hans (1936). “Logistic Empiricism in Germany and the Present State of its Problems”. *Journal of Philosophy* 33 (6):141–160.
- Reisch, George (2005). *How the Cold War Transformed Philosophy of Science: To the Icy Slopes to Logic*. Cambridge University Press.
- Rescher, Nicolas (2006). “The Berlin School of Logical Empiricism and its Legacy”. *Erkenntnis* 64 (3):281–304.
- Rosenberg, Alex (2000). *Philosophy of Science: A Contemporary Introduction*. Routledge. (邦訳: アレックス・ローゼンバーグ (東克明, 森元良太, 渡部鉄兵訳) 『科学哲学—なぜ科学が哲学の問題になるのか』, 春秋社, 2011.)
- Routley, Richard (1980). *Exploring Meinong’s Jungle and Beyond: An Investigation of Noneism and the Theory of Items*. Research School of the Social Sciences.

- Russell, Bertrand (1903). *Principles of Mathematics*. Cambridge University Press.
- (1905). “On Denoting”. *Mind* 14 (56):479-493.
- Stout, George Frederick (1896). *Analytic Psychology*. Allen & Unwin.
- Twardowski, Kasimir (1894). *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen: Eine psychologische Untersuchung*. Hölder.
- Uebel, Thomas (2010). “Some Remarks on Current History of Analytical Philosophy of Science”. in F. Stadler, D. Dieks, W. Gonzales, S. Hartmann, T. Uebel & M. Weber (eds.) *The Present Situation in the Philosophy of Science*. Springer, 13–27.
- van der Schaar, Maria (2013). *G. F. Stout and the Psychological Origins of Analytic Philosophy*. Palgrave Macmillan.
- Wilfing, Alexander (2015). “Kant and ‘Austrian Philosophy’ – An Introduction”. in Violetta L. Waibel (ed.) *Detours: Approaches to Immanuel Kant in Vienna, in Austria, and in Eastern Europe*. V&R Unipress, 19–26.
- Williamson, Timmothy (2014). “How Did We Get Here From There? The Transformation of Analytic Philosophy”. *Belgrade Philosophical Annual*, 27:7–37.
- Woleński, Jan (2015). “Lvov-Warsaw School”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy (Fall 2017 Edition)*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2017/entries/lvov-warsaw/>>.

(山口大学時間学研究所)